



Title	明治五年刊『西洋家作雛形』の建築用語
Author(s)	藤田, 治彦
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 1999, 33, p. 1-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48192
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

明治五年刊『西洋家作雑形』の建築用語

藤田治彦

一はじめに

一八七二（明治五）年の十月、『西洋家作雑形』が東京の玉山堂から出版された。村田文夫と山田貢一郎の共訳によるイギリスの建築書の邦訳で、四冊一組の和本であった。原著者名は、同書の凡例に「シーア、ブリュス、アルレン」と紹介されている。⁽¹⁾これに続く建築に関する邦訳出版物には、一八八二（明治一五）年のチャンブルス編（關藤成緒訳）『百科全書・建築學』、同原書別版の邦訳である一八八四（明治一七）年のチャンブル編（都築直吉訳）⁽²⁾『百科全書・造家法』や、一八八六（明治一九）年のコンドル著（松田周次・曾補達蔵訳）『造家必携』などがある。⁽³⁾しかし、これらの書物や百科全書の一部は、すべて明治十数年半はあるいはそれ以降に刊行されたものであり、この種の出版物のなかでも、『西洋家作雑形』は際だつて早い時期に翻訳刊行された住宅建築書であった。

『西洋家作雑形』は明治の日本で最初に邦訳された住宅建築書であつただけではない。同書は、扱う対象をほぼ住宅に限つているものの、当時としては他に比肩するものはない、充実したその内容からすれば、和書、邦訳書の

別を問わず、明治の日本で出版された最初の建築書であったとさえ主張しうるものである。その十年後に刊行されたチャンブルス編『百科全書・建築學』と、そのさらに二年後に出版されたチャンブル編『百科全書・造家法』は、それぞれ別の版を底本としているものの、ともに『チエインバーズ・インフォーメーション』というイギリスの一般向け百科全書の建築の章の邦訳であつた。また、それらは初心者向けの西洋建築史概説というべき内容のもので、小さな判型の『百科全書・建築學』は百五頁の小冊子であり、『百科全書・造家法』は三分巻の百科全書の下巻中に三十二頁のみを占めるだけのものであつた。

それに対して、『西洋家作雛形』は、専ら住宅を対象とした実用書だが、その邦訳書名にもかかわらず、いわゆる住宅「雛形」本ではない。「雛形」本なら江戸時代にも刊行されていたが、それらはおもに大工や指物師のために詳細部分の形状等を図示したもので、近代的な意味での建築について詳説した書物ではなかつた。また、全四巻構成で、巻之一（二十九丁五十八頁）、巻之二（二十八丁五十六頁）、巻之三（三十四丁六十八頁）、巻之四（二十八丁五十六頁）、あわせて全四巻二百三十八頁というその頁数から、そして、従来の各種「雛形」本や「規矩術」書とは異なり、詳細だけではなく、建物の平面、立面はもちろん、設備までをも含めて建築物全体を扱つたその内容からしても、『西洋家作雛形』を日本で出版された最初の建築書と呼ぶことは許されるだろうと思われる。ただし、それを徹底的に主張するには、日本の「建築書」とは何かという論議から始めねばならず、それは本論の目的ではない。

本論の目的は、『西洋家作雛形』の底本または原書を確認し、訳出の背景を探り、明治初年に邦訳刊行された極めてまれな建築書をその原著と比較し、両書で用いられている建築語彙の英和対照表を作成し、明治の日本における建築書をその原著と比較し、両書で用いられている建築語彙の英和対照表を作成し、明治の日本における

る英語建築語彙の邦訳のありかた、和英両概念の対応のさせかたに関する分析的考察を行うことである。『西洋家作雑形』が明治の日本で最初の本格的住宅建築書であつたことを考えれば、それは西洋建築的な思考の日本への移植のありかたについて、とくに住宅建築に関して、考察を深めることにつながるだろう。

二 『西洋家作雑形』訳出の意図と背景

東京火災ノ甚シキハ其因ニアリ一ハ都會繁華ニシテ火ヲ用ユル度ナキナリ一ハ土地曠漠ニシテ風ヲ受クル烈シキナリ一ハ人戸衆多ニシテ材ヲ取ル」粗麿ナルナリ昔人防禦ノ術ナキヲ苦シテ之ヲ全盛世間繁華地方ノ事奈何スヘキナシトセリ今茲壬申仲春ノ災其慘極マル官之ヲ憫シテ救恤ノ典ヲ舉行ヒ且後災ヲ慮カリ大ニ家室ノ制ヲ變革シニ洋式ニ效フソレ洋人ノ家室ヲ築造スルヤ素ヨリ美麗ヲム子トスルニアラス専ラ火災防禦ヲ主トスルナリ故ニ自ラ失火スル「ナケレハ他ノ延焼累焚ノ患ナシ今官ヨリ令シテ其方法ニ効ハシムレハ祝融風伯寇スルト雖氏連街比屋一時焦土ノ慘ナカルヘシ其仁豈大ナラスヤ偶英人余ニ贈ルニ小冊子ヲ以テシ謂テ曰君之ヲ譯傳セハ即今築造經營ノ一助トナルヘシ既ニ都下民庶此方法ニ因テ火災ヲ免スレハ僻邑遐陬ト雖氏必ス傳ヘテ之ニ効ハシ僻邑遐陬之ニ因テ火災ヲ免スルニ至テハ則君ノ世ニ徳スル亦大ナリ啻ニ即今都下築造經營ノ一助タルノミナラスシテ此冊子モ亦榮ト云ヘシ余乃チ山田兄ト相謀リ共ニ之ヲ譯述シ緝メテ四卷トナシ且竊ニ昔人奈何トモスルナキノ禍患明聖ノ澤ニ由テ今ヨリ將ニ絶セントスルヲ喜フ依テ卷端ニ題スルコト爾カリ

旨

村田文夫
譯⁽⁴⁾

訳者のひとり村田文夫はこのように序に記している。東京の火災は甚だしいが、その原因は三つある。第一に、東京は繁華な都會で限りなく火を用いる。第二に、土地が広く、風が強い。第三に上げている原因是、人家が密集して、火災となると消火が困難である、ほどの意味であろうか。この部分の解釈は更に検討を要する。

次に触れられている「壬申仲春ノ災」とは、一八七二（明治五）年二月二十六日の午後三時頃、和田倉門内のものと会津屋敷に発し、銀座御堀端から築地にかけての四十一か町を焼きつくした大火であった。自分自身、木挽町の邸で罹災した東京府知事由利公正は、翌朝早速、太政官に出て、次のように申し入れたとされる。「……人間の労力が残るというのが国の一一番大切なことであるから……どうかれんが建築にしたい。それにしては是非政府で御助勢下さらねばならぬ。この輦轂の下の町を造るのじやから、どうか悉皆願いたい。……全体会金はどの位要つてもこられはやらねばならぬ。日本の名誉に關する事じやによつて……。⁽⁵⁾」「輦轂下」⁽⁶⁾とは天子の乗る車のことで、「輦轂下」は天子のひざもと、つまり皇居の地あるいは首都を意味する。

同年二月三十日には、内閣制度成立によつて廃止されるまで明治政府の最高官庁であった太政官より、東京へ全市をれんが建築家屋で不燃化する方針の沙汰が出され、三月一日には、東京府知事名により「れんが家屋建築、御趣旨告諭」が出された。府下は首都になつたのだから、今度の焼失地域は道路をとりひろげ、近いうちに公布するれんが家屋で再建する予定でいる。費用その他の点で通達することもあるから勝手に新築することは差し控えるよう、という内容のものである。⁽⁶⁾

いかに大火であったとはいえ、東京全市をれんが建築家屋で不燃化する方針が火災後わずかな日数で示された背景には、東京府知事らの強力な働きかけと、それを支持する政府内外の強い意見があつたのであろう。この火災の

被災地である、皇居から外国への玄関口である築地にかけての一帯は、新しい日本の政治経済の中心であると同時に、外国人の交通の要所でもあった。

五月には、前年十月に米欧に向けて出発した岩倉具視に条約改正交渉の全権を委任することになるわけだが、明治五年は不平等条約を改正する最初の機会が訪れた時期であった。政府は、その交渉を有利にしようという目論みもあって、日本の文明開化政策あるいは国際化（西洋化）政策の方向を実体的かつ視覚的にも明示しようと、いわゆる銀座煉瓦街の西洋化ないし洋風化あるいは美化の計画に着手したとされる。⁽⁷⁾越前出身の維新の功臣である東京府知事由利公正も、五月には特命全権大使岩倉具視の一行に加わり欧州各国を巡遊することになる。

その五月に、邦訳者のひとり村田が書いた『西洋家作雛形』の序は、そのような銀座煉瓦街の計画のそれとはまったく対照的な、明治政府の火災対策および救済策を強調している。民間の罹災者救済寄金の申し出に刺激されて、大蔵省は官員有志の募金運動を始めた。これが官が行つた「救恤ノ典」であろう。また、同省は貸家会社の設立案を東京府に示している。これも「家室ノ制ノ變革」だが、「洋式ニ效フ」のだから、むしろこの場合は、三月に府知事名で出された「れんが家屋建築、御趣旨告諭」と、それに続く銀座煉瓦街の建設計画をさしているのであろう。ただし、東京府は「れんが家屋」の入居者は必ずしも罹災者に限らないと考えていた。

村田は、政府や東京府がこの機会に西洋家屋をモデルにしようとしているのは、あくまでも実用的な理由のためで、「西洋人のような住宅をつくるのは、美麗を主眼とするのではなく、専ら防災を重んじるためで、自宅から失火することがなければ、延焼の心配のない住まいとするためである。政府が命令してそのような方法を倣わせれば、火災や風の神が害を加えようとも、家々が連なる街並みが一時に焦土と仮すような惨事はないであろう」と断言し

ている。⁽⁸⁾ ある英國人がこの小冊子を訳者に贈り、邦訳して伝え広めれば防災の一助となると助言した、とその序は続いているが、大火と出版の時期が非常に近いので、この訳業が東京の大火から始まつたと結論するには、さらなる調査研究が必要だろう。また、訳者は、大都市の防災と建築のみを念頭に『西洋家作雛形』を訳出したわけではなかつた。東京「都下」の人々がこの本に示されている方法で火災を免れることができれば、中央から遠い地域でもそれにならうようになり、昔の人はどうすることもできないと考えていた禍を、ついには絶つことができるようになるだろう、というのが、序の結びの部分で村田が語る、『西洋家作雛形』訳了に際しての訳者の願いであった。⁽⁹⁾

三 『西洋家作雛形』の原本

訳者は『西洋家作雛形』の凡例において、その原本と原著者を次のように紹介している。「一 原本は英國大工頭シーザー・ブリュス、アルレン氏の著作にしてジョン・ウイール氏之を増補したるものなり蓋此書千八百七十年の鏤行に係り英國にて近來改正したる造家の方法を盡く圖解せるものにて宮殿樓臺の如き大建物を除くの外尋常家宅の造法は悉く細記したる書なり」。⁽¹⁰⁾

これまでこの『西洋家作雛形』の原本は確認されていなかつた。『西洋家作雛形』という邦訳書名は参考程度に考え、「アルレン」という原著者名と、「ウイール」という増補者名、および一八七〇年というその増補版の刊行年を頼りにこの原著を探した結果、ロンドンのブリティッシュ・ライブラリーで、出版年こそ多少異なるが、それを確認することができた。著者は現在ならむしろ「C・ブルース・アレン」と表記されるべき人物で、原書名は短く紹介すれば『コテージ・ビルディングCottage Building』である。省略もカタカナ表記も伴わない直訳書名のか

たちで紹介するならば、『小住宅、労働者階級の改良住居のためのヒント集』⁽¹⁾ ということになる。本論では以下、同原書を短く『コテージ・ビルディング』と表記する。

『コテージ・ビルディング』の一八六七年版は第六版で、『西洋家作雑形』の底本とされる一八七〇年版はまだ確認されていない。しかし、『コテージ・ビルディング』の原文と『西洋家作雑形』の訳文とを比較するかぎりでは、両版間に内容上の大きな相違はないだろうと推定される。より厳密に記すならば、『西洋家作雑形』の記載事項のなかで、それに対応する箇所を『コテージ・ビルディング』に見いだせない事項はない。したがって、一八六七年版にはなかつた何らかの増補部分が一八七〇年版に加わっている可能性は否定できないが、『コテージ・ビルディング』一八六七年版の原文と『西洋家作雑形』の訳文を比較する上で、大きな支障はないということになる。

明治の日本で最初の本格的邦訳建築書が「労働者階級の改良住居のためのヒント集」であつたことはやや意外だが、訳出の背景あるいは動機とその原書の内容とはまさしく重なつてゐる。明治時代に西洋建築が求められたのは、文化国家としての体裁を整えるためであつた、ということが強調されるが、明治初年には「美麗を目的とするのではなく、火災防御を目的」として、西洋建築の知識を広めようとする人々がいたのである。

四 『西洋家作雑形』の原著者と増補者

原著者アレンの経歴等は不明に近いが、一八五〇年に開催のロンドン万国博覧会の競技設計参加者中に“C. B. Allen”の名がある。⁽²⁾ 少なくとも『コテージ・ビルディング』第五版刊行の時点では、ウエストミンスターのパートナメント・ストリート四〇番地に事務所を構える建築家であつた。

増補者であるジョン・ウェール (John Weale, 1791-1862) はおもに建築を扱った出版者で、ワイトウイックの『建築の宮殿』、ピュージンの『眞の原理』、ガーベットの『建築デザインの原理』など重要な建築書を世に送り出した人物であった。⁽¹³⁾ 一八四三年から一八四五五年まで『季刊建築評論』を刊行してもいる。⁽¹⁴⁾ 『コテージ・ビルディング』では巻末に追加された一章、"ECONOMY OF RURAL DWELLINGS" を執筆しており、それは『西洋家作雛形』では、「田舎の家宅に付き儉約法」として訳出されている。

『コテージ・ビルディング』やガーベットの『建築デザインの原理』を含む「ウェールの叢書」はウェール没年の一八六二年に開催された、第二回ロンドン万国博覧会における受賞出版物であった。それらの出版物はウェール没後、別の出版社であるヴァーチュー社が買い取り、その刊行を続けた。

五 『西洋家作雛形』と原本『コテージ・ビルディング』との構成上の比較

『西洋家作雛形』は『コテージ・ビルディング』のほんとすべてを訳出していながら、後者の第一章 (CHAPTER I. On the Necessity that exists for increased Attention to the Dwellings of the Poor) を含めていない。しかし社会的要請があつて、イギリスで著され、日本で訳された出版物といつていいが、本書のような刊行物を必要とする人々の種類あるいは階層は両国では異なっていた。イギリスでは貧民あるいは労働者階級の住居を念頭に著されたものだが、日本では一般住宅の改良の参考に訳出されたのである。原書第一章の割愛は、邦訳書では内容的に不必要あるいは不適切と考えられたためのものであろう。『西洋家作雛形』と原書『コテージ・ビルディング』との構成上の対応関係は以下の通りである。

卷之二

第一編 場所并に位置の事

第二編 水利法并に給水の事

第三編 壁塀の事

卷之三

第四編 床の事

第五編 屋根の事

第六編 風入并に温氣の事

第七編 一階二軒造の小家の事

CHAPTER III. Remarks on a Single-floor Double Cottage

卷之四

第八編 家宅の平面、前面断面の圖解

第九編 建築入費の事

第十編 建築諸職人の分課

卷之五

第十一編 ガルド子ル氏并にソン氏の職人に備くたる一家の類法

APPENDIX. Messrs. Gardner and Son's Plan for a Labourer's Cottage

CHAPTER II. Section I. Site and Position

CHAPTER II. Section II. Drainage and Supply of Water

CHAPTER II. Section III. Walls

CHAPTER II. Section IV. Floors

CHAPTER II. Section V. Roofs

CHAPTER II. Section VI. Ventilation and Warming

PLATES. Plans, Elevations, Sections, etc.

ESTIMATE OF COST

SPECIFICATION of Works to be done in the erection of cottage

第十一編 五室の家宅建築に付諸職人の分課

第十一編 田舎の家宅に付諸職人の分課

SPECIFICATION of Works to be done in the erection of one labourer's cottage of five rooms
ECONOMY OF RURAL DWELLINGS for Tradesmen and persons of limited incomes (by John Weale)

六 『西洋家作雑形』の建築用語の原語 (英訳語)

以下に『西洋家作雑形』で用いられている建築関連用語を、室名、材料名、などに分けて検討してみよう。それは『西洋家作雑形』の次に刊行される邦訳建築書『百科全書・建築學』と比較されるべきだが、それは別の論文で考察するとして、トトロドは明治時代末期のほぼ標準的な建築用語を掲載していくと考えられる、一九〇六年(明治三十九)年刊の中村達太郎著『日本建築辭彙』と照合してみるとよいとする。実際のところ、すでに述べたように、『百科全書・建築學』は西洋建築史概説であり、『西洋家作雑形』と対等に比較できる内容のものではない。それに対して、翻訳書ではないものの、『日本建築辭彙』は英米独仏の対応語を所々付記した実用的建築用語辞典なので、やはり実用書である『西洋家作雑形』と比較するにによって、建築用語の明治の初めから終りまでの、その翻訳語の変遷の一部を垣間見ることができるのであるだね。

なお、『西洋家作雑形』本文中では、日本語(漢字)の訳語に、念のため英語をカタカナ書きで補つたり、ルビを振つたりしている場合がある。ひらがなで日本語の読みを添えている場合もある。

○建築概念および建築関連動詞

まず現在の「建築」に対応する言葉と「建築」関係動詞を見てみよう。

building: 家、家屋、建物、建築、家宅、建築

build: 造る、作る、築く、建築する、築造する **complete:** 成就する

construct: 造作する **dome:** 圓天井形にする **erect:** 築く **rebuilt:** 再建する

「建築」という名詞はあるが、それは“building”に対応するものだ、底本の本文中にも“architecture”的語はない。『コテージ・ビルディング』は実用書であり、序文の著者名の下に“architect”であるのが唯一の“architecture”関連語である。“building”には他に、「家」「家屋」「建物」「建築」の訳が当たるが、「家宅」の訳が最多である。

「建築物」という訳はない。

「建築」関連動詞に注目するに、 “to build”は「造る」「建築する」の訳があり、“to construct”にも「造作する」の訳が当てられてくる。工部大学校に造家学科が設けられ、建築学会も造家学会として出発した明治の初めの建築概念もわからうところなのだ。明治初年には、少なくとも『西洋家作雑形』においては、「建築」は構築的、工作的な意味の言葉で、芸術的な意味の言葉ではなかった。

○職能

建築にかかる人々の職業名の邦訳は以下の通りである。

architect: 建築師 **bricklayer:** 煉化石積立職人 **carpenter:** 大工

contractor: 家作請合條約書付 excavator: 土堀職人 glazier: 硝子細工人 joiner: 指物師

mason: 石工 painter: 色繪師 paper-hanger: 紙張職人 plasterer: 左官

plumber: 鋼綱工師 projector: 雛形師 slator: 盤石にて屋根を葺く職人 smith: 鍛冶

まず、「アーキテクト」だが、『西洋家作雛形』の底本である『コテージ・ビルディング』は、極めて実務的な実用書で、むしろ「建築諸職」向けの本であるためか、“architect”の語は一箇所に出てくれただけで、「建築師」の訳があてられてくる。ならば、「建築諸職」などの「建築」は何の訳かというふになるが、それは時には“erection”の訳であり、時には“construction”の訳である。

“contractor”の語が出てくる箇所に対応する部分は「家作請合條約書付……」と訳され、職名としての邦訳とはなってこない。“projector”は、文脈からすれば住宅開発などをてがける人物あるいは住宅企画者だが、「雛形師」の訳があてられてくる。「雛形」だけなら、ほほ“design”の語に対応して使われているが、“designer”という職名は底本にも使われていない。

○建物の種類

以下のような用語が建物の種類に関して用いられている。

building: 家、家屋、建物建築、家宅、建築

cottage: 家、家屋、家宅、住家、小舎、小家 cottage building: 家宅

double cottage: 一軒造の小家、二軒造の家宅、二軒造の小宅 dwelling: 住家、家宅

church: 教會 circus: 曲馬場 farm-house: 農家 fuel house: 焚物小舎

habitation: 居住' 住居 house: 建物' 家宅' 建家 lodging-house: 借家

modern cottage: 現代小家 rural dwelling: 田舎造の家宅 school: 學校

single cottage: 一軒造の家宅 site: 地所 tool-house: 道具舎屋

two-storied cottage: 二階造りの家宅 villa: 園園 warehouse: 藏 wash house: 洗濯部屋

workshop: 士事場

住宅等をやす言葉としては「家宅」がもつとも多く用いられてゐる。“cottage”がその原語である場合が多いのは、底本となつた『コテージ・ビルディング』の記載内容によるものであつて。“cottage”には「小家」や「小舎」の訳も用いられているが、例外的であり、訳者は“cottage”をひらわけ小さな家として紹介しようとしてはいなかつた」とがうかがわれる。また、“building”の訳にぬ「家宅」がもつとも多く用いられており、明治初期には、現在の「建築」がまさ「造家」ひもれるほど「家宅」の重要性が大きくなつた。また、「家」の概念が現在のそれよりも広かつた」とが想像されるのである。「住家」および「家宅」の訳はあるが、住宅の語は見えない。「住居」は“habitation”の訳としてある。

○部屋と平面

個々の部屋ならびにやれに準じる個別の空間の名称は以下のみおらである。

bed-room: 眠部屋 cellar: 窓藏 closet: 衣櫫 diary: 士乳場 entrance: 入口

entrance porch: 入口、入口部屋 kitchen: 台所、庖厨 living-room: 住居部屋

lobby: 廊下 office: 用場 parlor: 客間 passage: 廊下、通路 porch: 入口部屋

privy: 傷窓 room: 房室 store room: 物置場 wash place: 洗濯場 water-closet: 雪窓

“living-room”が一貫して「住居部屋」と訳されているのが特徴的である。ルビは「すみごへや」となっている場合もあり、「居間」という訳はまったく使われていない。また、「居間」という言葉は『日本建築辭彙』にも掲載されておらず、「部屋」があるのみである。

○窓と開口部

窓と開口部に関する訳語は二つある。

back-door: 家後の戸口 casement: 障子、障子骨、匡組 dormer: 二階窓

door: 戸 doorway: 戸口 opening: 窓間 sash: 障格子、障子 sash-frame: 障子

skylight: 明窓 top light: 明り取り window: 窓 window-fastening: 窓を固定する金物

window-frame: 窓の匡組、窓匡 window sash: 窓の格子 window-sill: 窓敷居

「扉」の語はまったく使われず、「door」と“doorway”的訳は「戸」および「戸口」である。これは『日本建築辭彙』でも同様で、明治末まで「扉」は「戸」のなかの極めて特殊な形式として扱われていたことを思われる。興味深いのは“opening”が「空間」と訳され、「すきま」のルビがふらつている。これは開放的な建築になじんだ日本の専門家には、「戸口」や「窓」などを一括しての、壁にあけられた「開口部」といった概念が理解しにく

かつたためであらうか。“sash”を「障子」と訳してゐる。『日本建築辭彙』になると「障子」の語を“sash”に訳してはいない。

○構造および基礎

基礎を含む構造に関しては、次のような用語が使われてゐる。

basement: 基礎 bending 橋曲 brace: ブレース

brick construction: 煉化石造 frame: 縱形 frame-work: 匠組, フレームウォルク
footings: 地形 ground: 地面 masonry: 石細工 platform: 地盤

建築用語ひつての「基礎」 ふきつ「言葉は思へたせぬ」一般化しなかつたのか、『日本建築辭彙』には「礎」とある。“brick construction”「煉化石造」 ふきつ “masonry” が「石細工」となつてゐるのは、日本の石工が大規模な構造ではなく、小規模な細工仕事に従事していたために、積石造その他の言葉が思い付きにくかつたためであらうか。

○壁体と柱

壁や柱に関しては、次のような用語が使われてゐる。

bond-timber: ボンブル チンブル (壁中の貫柱) cob wall: ケブ 壁 door-post: 门柱
external wall: 外壁 English bond: 英國の積方 Flemish bond: フラムヘル國の積方
hollow wall: 空壁 inner partition: 屋内の界壁 mud wall: 泥壁 partition: 界壁、隔壁

partition board: 選柱 quarter: 番柱 side-post: キヤム、ボスル wall: 壁壇

「英國積」あらこは「イギリス積み」とこつた用語はまだ成立していなかつた。

○屋根と床

屋根、天井、床等に関しては、次のよつた用語が使われてゐる。

batten: 床板 ceiling: 天井 ceiling-joist: 天井根板 floor: 床 floor-joist: 根板

lime-ash floor: 石灰床 ground floor: 地床 ground story: 1階なま平屋の床

root: 家根 roof tile: 屋根瓦 slate roof: 磁石屋根 tile fillet: 瓦瓦 tile floor: 瓦床

upper floor: 上床 upper story: 1階

煉瓦は「煉化」と書かれ、「れんか」と呼はれている（ルビは「れんか」）。“roof”には「屋根」と「家根」の両表記があら。“gable”は「ガブル」と表記され、破風の語はあてられていない。

○詳細

詳細部分の名称に関しては、次のよつた用語が使われてゐる。

baluster: 柱子、手すり cesspools: 飲料水の管 chimney-flue: 烟道の管 chimney-funnel: 烟筒

chimney-pot: 烟筒の土器 chimney-shaft: 烟筒 chimney-stack: 烟筒 cowl: カowl

eave: 床 eaves-gutter: 軒樋 fillet: 支木 gutter fillet: 樋

house-drain: 家々の各溝、家屋に属せる管溝 joint: 接縫 joist: 根板

lath: 横木' ラッズ lintel: 鳴頭 mantel: マントル newel: ニュエル

pointed arched doorway: 尖ったるT形の入口 rafter: 檻 rain-water filter: 雨水濾

ridge: 棟 ridge-tile: 棟瓦 sill: 敷居 sink: 流し場 sleeper: 根板木 staircase: 級段

stairs: 階梯' 楼梯 string-bearer: ストリング' ラーナル tread: 平板

rimmer: ルーフンブル valley tile: 屋谷瓦 wind-vane: 風見

“pointed arched doorway” は「尖ったるT形の入口」 と訳されており、ナシック風の「尖頭アーチ」 などの用語は用ひられてゐること。あたゞ一例として、階段関係の詳細を見るなどと、 “newel” は「子ウェル」 のまま訳し残され、 “staircase” は「階段」 と訳されるなど、階段ひとへをひとつと、 詳細用語の違いは観念そのものの違いひとつながらつてゐるに思われるのである。“tread” も「平板」 となつてゐる。『日本建築辞彙』 になると「踏面」 があたりられるようになる。

○設備および衛生関係

設備および衛生関係では、次のような用語が使われてゐる。

bell-trap: 半鐘形の具 butt: 水廻場 cistern: 注管 cooking-stove: 煙収するペーパー

drain: 水廻 drainage: 水利' 水利法 drain-trap: 水廻 drain-pipe: 水水管

dust house: 腐葉 dust shaft: 塵落筒 fire-place: 水焚場 pump: ポンプ' 駐筒ポンプ

sewer, main: 大水道 ventilation: 風氣、風氣法、風入 warming: 暖氣

waste-pipe: ト水桶、ウーステ、パイプ

“ventilation”が「風氣」「風氣法」「風入」，“warning”が「溫氣」みなしてこるのが興味深い。『日本建築辭彙』はなむ「換氣塔」のこつ用語が“ventilation tower”に近づかれてゐる。『暖房』「暖氣」等の語は『日本建築辭彙』にゆなこ。

○材料

建築材料に關しては、次のような用語が使われてゐる。

asphalte: 麻青 brick: 煉化石 cast-iron: 鋳鉄 cement: 着合物 concrete: 混合物

corrugated iron: 織鐵のある鉄 fire-brick: ハビール、ハコッキ glass: 磷子

hair mortar: ハール、モルタル malm picking: ハーベ、ムラッキン

material: 物材、材品 mortar: 漆灰 paper: 色紙、壁紙 papering: 壁紙

putty: パッチー slate: 磐口、盤口 slate roof: 磐口屋根 T-nail: T形の釘

ornamental tile: 飾瓦 pavement: 敷石 Pisé walling: 鋳形造 plain tile: 平瓦

plaster: 漆灰 tile floor: 地床 timber: 材木 wrought-iron: 鋳鉄

『日本建築辭彙』では“brick”は「煉瓦」みなしてこむが、「煉化石トモイフ」もやれ、「煉化石」の名称は明治期を過じて使われてこないがわから。“mortar”及び“plaster”には「漆灰」の訳を近づけてこむ。現在使われてこむ

「漆喰」は「石灰」の唐音読みの当て字だが、「漆灰」は両者の中間形ともいえる。『日本建築辭彙』では「漆喰」となっている。"putty" もそのままで「ピュッチー」とされているが『日本建築辭彙』になると現在のように「パテ」となっている。「煉瓦」「漆喰」「パテ」などの材料名は、明治期のうちに現在でも使用されている日本語名称が確立した例である。

○家具および造作

家具および造作関係語では、第一に、底本である『コテージ・ビルディング』で唯一 "furniture" の語が出ている箇所が、ほんの数行だけ『西洋家作雑形』に訳出されていないことに象徴されているように、省略されているか、原語のままカタカナ表記されている部分が多く、以下の通りである。

cupboard: ラップボーラー decoration: 装飾 dresser: 料理臺 food-safe: 食物棚
grate: グレート safe: 食物棚

○建物周辺および都市と地域

都市や地域に関する、建物の外部環境関係では、次のような用語が使われてゐる。

city: 都府 district: 地方 garden: 園庭 hedge: 生垣 street: 市街 town: 城市
trench: 溝 vicinity: 近傍 yard: 庭

“town”に「城」の語を冠して「城の町」は、明治初年の訳であるといふを実感させる。

○設計計画用語

設計や計画に関する用語には、以下のよつたなものがある。

acomodation: 間取 arrangement: 位置、間取 design: 雛形 designing: 雛形の工夫
 drawing: 雛形 elevation: 地上の所の表面、表面、前面 front: 前面
 plan: 平画、方便 space: 間隙、空間、空地 specification: 分課
 transverse section: 横手の断面 section: 断面

“design”、 “designing”、 “drawing” などは「雛形」の語が用いられているふうだからすれば、底本の『ローテーバ・ルティング』は施工を主眼にまとめられた実務書だが、『西洋家作雛形』はそれを雛形としてそのまま使つか、あるいは設計の参考とすべく記出された刊行物であつたといふ。〔分課〕 ふ記されていふ “specification” は、『日本建築辭彙』では「仕様書」となつてゐる。

○防火防災、積算、施工関連用語

最後に、『西洋家作雛形』訳出の背景であつた防火防災に関する用語、ならびに、積算、施工、修理等に関する用語には、以下のよつたものがある。

cost: 入費 estimate: 積算 fire-proof construction: 火防の造法
 fire-proof floor: 火災の患ひなき床、火災の恐なき床 re-instatement: 再建
 repair: 修復、修復 work: 作業

七 おわりに

以上、『コテージ・ビルディング』と『西洋家作雑形』とを比較対照しながら、西洋（英語）の建築用語が明治初年にどのように日本語に翻訳されたのかを見てきた。それまでの日本建築になかった概念は当然、訳出困難で、奇妙な訳語も多い。しかし、全体的には、明治五年という、まだ正式な建築教育などまったく始まつていないう段階で行われた翻訳にしては、かなり適切な訳語が当てられているというべきだろう。訳者ないしは翻訳に助言を与えた日本人に、実物の建物あるいは雑型や図面のようなもので、建物の各部を指し示し、それらに対応する日本語を彼らが見いだしやすいように助けた西洋人がいたのではないだろうかと想像される。

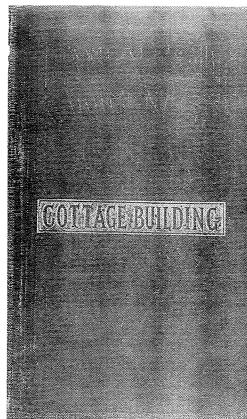
翻つて記すならば、『西洋家作雑形』に用いられている建築関連用語は、最初期の一群の建築翻訳語としてのみ価値があるだけなのではない。それらは幕末までどのような言葉が建築用語として日本で使われていたのか、そして明治初年にどのような英語に対応すると考えられたのかを記録する、貴重な史料なのである。

注

- (1) アルレン（村田文夫・山田貢一郎訳）『西洋家作雑形・一』玉山堂、一八七一年、三二
- (2) チャンブルス（關藤成緒訳）『百科全書・建築學』文部省（一八八一）およびチャンブル（都築直吉訳）『百科全書・造家法』丸善（一八八四）は、むろに William and Robert Chambers (ed.), *Chambers's Information for the People*, W. & R. Chambers, London and Edinburgh, n.d. の "Architecture" の章の邦訳である。同一書別版の訳だが、記述内容、図版とも、相当異なつてゐる。前者は秋月胤永が、後者は大鳥圭介が校閲者となつてゐる。

- (3) コンドル（松田周次・曾禰達蔵訳）『造家必携』加藤良吉、一八八六年
- (4) アルレン（村田文夫・山田貢一郎訳）『西洋家作雛形・一』玉山堂、一八七一年、一丁
- (5) 日本建築学会編『近代日本建築学発達史』丸善、一九七一年、九八一九八五（上野勝弘執筆）
- (6) 上掲
- (7) 阿部公正・神代雄一郎・浜口隆一・山本学治『建築学大系・6・近代建築史』彰国社、一九五八年、一三一九一四〇（阿部「洋風建築の伝来」）
- (8) アルレン（既掲）、「祝融」は火事、火災、「風伯」は風の神の意味。
- (9) 上掲、二丁
- (10) 上掲、二丁
- (11) C. Bruce Allen, *Cottage Building, and Hints for Improved Dwellings for the Labouring Classes*, Virtue & Co., 26, Ivy Lane, Paternoster Row, 1867.
- (12) Roger H. Harper, *Victorian Architectural Competitions*, Mansell Publishing Limited, London, 1983, p. 180.
- (13) George Wightwick, *The Palace of Architecture*, John Weale, 59, High Holborn, London, 1840. A. W. N. Pugin, *The True Principles of Pointed Architecture*, John Weale, 59, High Holborn, London, 1841. Edward Lacy Garbett, *Rudimentary Treatise on the Principles of Design in Architecture*, John Weale, 59, High Holborn, London, 1850.
- (14) 「ガルニ子ル氏并ニハハ氏」の訳は、せじこへか「紳士建築家ガルドネル（ガーネル）」である。

明治五年刊行『西洋家作雑形』の建築用語

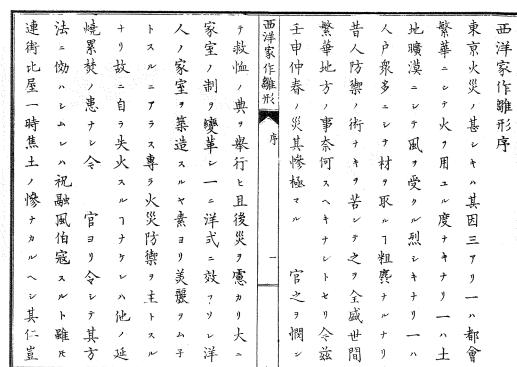


図版2
『西洋家作雑形』表紙
C. Bruce Allen, *Cottage Building*,
London, 1867. (British Library)

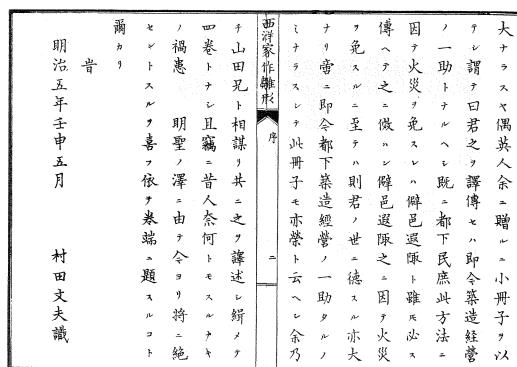


図版1
『西洋家作雑形』全四巻
明治五年 玉山堂(東京)

図版3
『西洋家作雑形』卷之一
一丁表裏

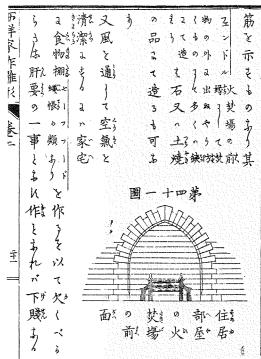
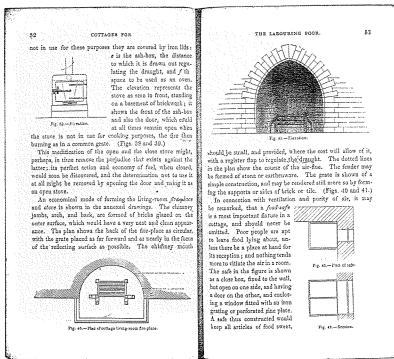


図版4
『西洋家作雑形』卷之一
一丁表裏



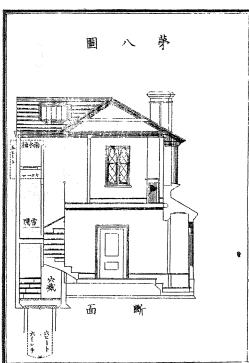
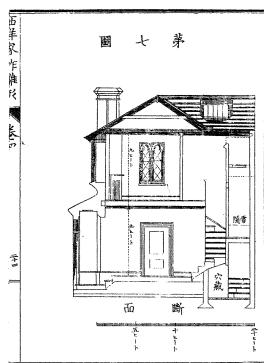
四版 5

西洋家作羅形
卷之二十一丁表

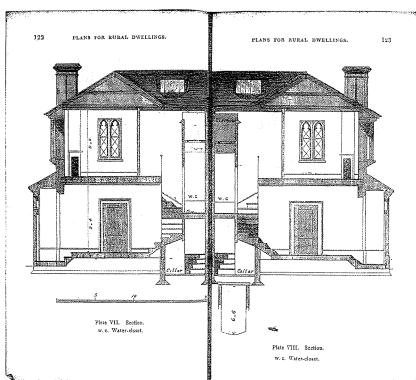


図版 6

四版
7



〔二〕 C. Bruce Allen, *Cottage Building* London, 1867, pp.52-53.



図版8
『ドリーブ・ジョンソン』
C. Bruce Allen, *Cottage Building*,
London, 1867, pp.122-123.